

おじいさんの タイムスリッ

葉影やすむ

おじいさんのタイムスリップ

三人は、どうやって宮中に忍び込むか、頭をひねった。

そうだ、皇居には秘密の抜け穴がある。2・26事件の後、もしもの場合に備えて作られたのだ。そこを逆に進めば陛下の寝室のすぐそばに出ることができる。

3人は変装した。

黒塗りのリムジンで皇居のわきにある公園の小さな小屋の前へ三人は移動した。

その中のくぐり戸を抜けると地下道が闇を下ってゆく。

お濠の下を抜けて、宮城の地下へ入る。「天井から水がしたたってるぞ」。「お堀の水だ」

そこに皇居で暮らすひとびとの防空壕がある。

そこから階段を上ってゆくと、小さな木戸があり、それをあげると、廊下の隅だった。薄暗い電球がともっている。

三人は廊下に出た。体についたすすを払う。

そこの廊下は行き止まりになっていて、3メートル先で曲がっている。

そこに彫り物のある大きな木のドアがあった。

それが陛下の寝室だった。

白州がゆっくりとドアノブを回すと、ドアは静かに内向きに開いた。

中には大きな天蓋付きのベッドがあり、敏感な陛下が物音に首をもたげて、三人のほうを見ていた。

「誰ですか」

白州が前に出て、低い声で言った。

「陛下。白州次郎です。お久しぶりです。」

うしろから吉田が名乗った。「陛下。吉田茂です。」

「何の用だ。こんな時間に」陛下は訝しげに眉をひそめて一同を眺めまわすと、枕元のメガネを手にとってベッドサイドのランプをつけた。

「陛下。驚かせて申し訳ありません。しかしどうしても極秘で、緊急の用件をお話しさせていただきたいと思い、秘密の地下道を通して御寝室にお邪魔させていただき」

「うむ。前置きは良い。申せ」聡明な陛下は引き締まった顔で急かした。

白洲は陛下に詰め寄った。

「陛下、いま決断を下さないと、東京は火の海になります。大阪も。そして・・・広島・・・」あまりのことに白洲は口ごもった。

その後説明を、吉田とおじいさんがひきついだ。

おじいさんが現代からやってきたこと。日本はこの後降伏を遅らせたばかりに、大変な運命を耐えねばならないこと。未来を変えるには今行動するしかないこと。そんなことを矢継ぎ早に語った。

陛下は美しい眼で、すべてをさとったように白洲を見つめ、うなづいた。

「わかった。白洲君。君の言うとおりにしよう。追い、いますぐ近衛君を呼びたまえ」

陛下は侍従を振り返り、命じた。そして白洲と吉田、おじいちゃんに向き直り、言った。

「任せておきなさい。わたしが命ずれば、彼とて反対できまい」

一同はテーブルの上に並んだ紅茶と茶菓子に手を伸ばした。

(これで危機は回避できるのだろうか)

白洲は考えた。

(近衛の性格からして、そう簡単に陛下に説得されるようなことはない)

吉田も同じことを考えているようだった。

(我々が近衛にこの先何が待ち構えているかをしっかり伝えられれば)

白洲は自分が最初におじいさんの話に示した反応を思い出し、吹き出しそうだった。

(頭が堅い男だからなあ・・・)

おじいさんの最新式電話を見せれば奴は納得するだろうか。

近衛の車が到着したと、侍従が伝えた。

一同は緊張した。

やがておもむろに扉が開き、近衛が入ってきた。

「お待ちせしました。陛下。お呼びでございますか」

陛下は立ちあがって近衛を迎え、握手を交わすとソファに導いた。

「大事な話だ、近衛君」

近衛は白洲、吉田、おじいさんの順に冷ややかな目つきで顔を見渡し、

「お揃いでございますな」と低い声で言った。

白洲が身を乗り出した。

「近衛さん、いまから陛下がおっしゃることはすべて真実だ。心して聞いてくれ」

「何だ、白洲。もったいぶって。」

おかしい男だ、というようにいつもの含み笑いを見せて、近衛が言った。

吉田が口を開いた。

「近衛君、日本の戦況が芳しくないことは、君にはよくわかっているんだろう」

厳しい口調だった。

近衛は陛下に向き直って言った。

「陛下、戦況は艱難辛苦を極めておりますが、必ずやわが国は、魂を持って状況を切り開くことをお疑いにならぬよう」

白洲が近衛の膝を叩いた。

「なにを言ってるんだ、近衛さん。もうわが軍は南方でも孤立して悲惨な状況だということを認めないのか」

近衛はきっと目を開いて睨み返した。

「白洲、口を慎め。わが軍にはまだ大和がある」

「バカ野郎、大和は戦闘機に囲まれてあっという間に沈むんだ」

かっとなって口走り、白洲はおもわず口をつぐんだ。

おじいさんが口を開いた。

「近衛さん、終戦を決断してください。」

「ダメだ、出来ない。」

『なぜだ』

「私の息子が人質なんだ」

日本はアメリカにもう一撃を加えた後、ソ連に仲介を頼んで有利に停戦講和をすすめる。それが海軍や陸軍のシナリオだった。

「私の一存ではどうしようもない。実権があるのは軍なんだ」

そこで海軍の責任者米内と、陸軍の阿南を呼ぼうということになった。

使いが出され、彼らの到着を待つ間、白洲たち三人は庭に出た。二月の東京は厳しい寒さが普通だが、この日は春を思わせる暖かい日差しが皇居の二羽にも降り注いでいた。鳥の鳴き声がする

。

「白洲さん、こんな美しい日本を、焼け野原にしてしまっっては行かん」

「当たり前です。そもそも開戦すべきでなかった」

吉田が振り返る。「わしは反対した。山本長官も反対だった」

「私たちの力が足らなかった。申し訳ない。海外留学していた私が、もうすこしアメリカの実力を、みなにしっかり伝えておくべきでした」

「神風だなんだあれくるっとる連中に言ったところで、聞く耳もたんよ」

「とにかく、いま止めなければなりません。東京が、大阪が、そして沖縄が、火の海になります」

「なんとか頑張ろう。米内とは長い付き合いだからな」

吉田が胸をバンと叩いた。

アメリカの対独参戦を望むチャーチルと、日本を貶めたい蒋介石が、日本とアメリカが妥協をしてよりを戻すのを嫌がり圧力をかけた。結果としてハルノートの冷たい返答が返され、日本は開戦を回避する口実を失った。しかしあそこで東条が踏ん張れば、天皇が踏ん張れば。軍部は怪物である。牛である。前に進むことしかできないのだ。それを止めるには、超人的な努力しかなかったのだ。

当時はまだサムライ魂なるものが人々を支配していた。死を怖れるな。逃げ出すのは卑怯だ。この考え方が人を縛った。

ここに国の誇りなどという思考があったらうか。

国民はそんなこと考えていたらうか。

身を投げ出してでも、開戦を止めるべきだったのではないらうか。

そして始まったならば、

一刻も早く停戦を模索すべきだったのではないか。

日本人は協調する。だが別の考えはありえなかつたらうか。

判断の誤りという見方もある。

岳父で大久保利通の二男、牧野伸が部屋に入ってきた。

「おい、茂。」

2・26の将校たちのことをおもいだした。

5・15の将校たち。牧野をつけ狙った連中のことも。

白州の頭の中。何で日本はこうなんだ。どうしてこうなんだ。

吉田の頭の中。

天皇の頭の中。おれは戦争を終わらせたい。

阿南が現れた。

阿南が言った。「陛下。降伏などありえませぬぞ。いまわが軍の使いが着々とロシアと交渉を進めておるのです」「まあ阿南君。陛下の話も聞こう」近衛が治めた。

当時空軍も特攻作戦を準備し始めていた。

特攻隊には何人か、特攻するのを断った人がいた。エースパイロット、d dもそのひとりである。

白州たちは彼に会いに行った。

「d君。君はなんとかして特攻に反対するグループを、訓練基地の中で作ってくれ」

「そんなことを言われましても」

「このような狂気の作戦をさせてはならんのだ」

「日本はもう負けるのです。このようなことをしても」

「何を言うのですか」

卓哉は特攻に志願した。何のためらいもないのだ、と自分に言い聞かせた。

(国のために死ぬのだ。これほど名誉な死に方があるらうか)

心の奥底に生きたいという気持ちはあった。生物である以上当然だろう。だがそれ以上に、自己犠牲という英雄的行為に興奮していた。自分がなにか高い、清いものになれる気がする。

（俺はこのために生まれてきたのだ）そう思うと胸の奥に熱いものがこみあげてきて、思わず兵舎の外に出ると、切れ切れの雲の浮かんだ空を見上げた。（早く出撃したい）

信二があるいてきた。憂鬱な顔をしている。「信二」

「おう」顔をあげようとしなかった。

「特攻を外してくれと頼んだが、許されなかった」

（なんだ、こいつ。何を言ってるんだ）卓哉は信じられなかった。

信二も卓哉と一緒に、先日志願したばかりである。

「おれはまだ生きたい。それにこの作戦は無意味だ。」

信二はうつむいたまま言い放った。（なにをいいやがる）

「日本は負けるのだ。もう形勢は覆らない。おれは昨日おやじに教えられた」

信二の親父は海軍の上層部にいる。わざわざ東京から、特攻に志願してはならないと電信が届いたのだ。

死ぬべきか。生きるべきか。それが問題だ。昔学校で演じたイギリスの戯曲の主人公、ハムレットよろしく信二はつぶやいた。国のために死ぬ。それは素晴らしいことだと俺は昨日まで信じていた。しかし今、その確信はない。国って何だ。父や母、妹のいるこの場所。それを守るためなら命を投げ出してもかまわない。悔いはない。しかし、もう勝てない戦争で、終戦の決断のできない政府の優柔不断の中で、意味のない自殺作戦に身を投じるのは・・・それにおれにはアメリカに友人がいた。彼らはわれらと同じ人間だ。笑顔は明るく、家族を愛して生きていた。そこまでして殺さなければならないのか。

国を守りたいのなら、むしろこの作戦に体を張って反対し、たとえ処刑されても作戦を中止させて、他の同僚を救うべきではないのか。政府の決定に反旗を翻し、今すぐにでも戦争を終わらせるべきではないのか。南東では悲惨なことになっていると先日斥候兵から聞いた。今我々の敵は、アメリカではなくて、政府ではないのか・・・

天皇は口を開いた。「わかった。停戦交渉を始めよう」

やった。白州たちは踊りあがった。「それでこそ陛下です」吉田は感激のあまり陛下の前に突っ伏した。おじいさんと白州は抱き合った。しかし阿南の声が響いた。

「私は納得いかない」

一同は振り返った。「陛下、もしそのようなことをなさるおつもりなら、ここでわたしを斬ってからになさってください」「無礼だぞ、阿南」

「陛下。我々は本土決戦に備えております。日本国民が、敵を前におめおめと臆病風に吹かれて降伏するなど、とても私には認めることはできません。」

「それはそうとロシアを通じての講和交渉はどうなっているのだ」

陛下は吉田に尋ねた。

「いや、芳しくありません。ロシアは信用できません。あるいは彼らも我らの衰弱に乗じて、北方から攻め入ろうとしているという情報さえあるのです」

「いや、ロシアとはうまくやっている。講和の条件を有利に導くことができるはずだ」

「それは取らぬ狸の皮算用だ。ロシアは昔から二枚舌だ。甘く見るな」白洲が叫んだ。

「ごちゃごちゃ考えるな。ただ英霊の導くまま、前に進むのみだ。お前はサムライ魂を忘れたか」

「バカ野郎。おれはサムライなんかなったことは一度もねえ。おいらは頭の先から足の爪まで現

代人なんだよ！」白洲は吐き捨てた。

「お前は・・・お前は・・・」阿南は顔面蒼白になった。

「陛下の前で何を言う！我々日本臣民は、一同陛下のために命を投げ出すために生まれてきたのだ！そうしてこそこの国の一致団結があるのを忘れたのか！」

陛下は沈黙していた。「いや、しかし、余も無理な戦はしないのがよいと思う」

近衛が重々しい口調で言った。

「あとは、総理である私に一任してください」

日本の、終戦時の総理は鈴木貫太郎。日露戦争で大武勲をあげ、天皇の侍従長として名を高め、2・26では君側の奸として撃たれるも一命を取り留めた大人物。だが、彼にしても、4月に就任してから、なぜ終戦まであんなに時間がかかったのか。

大空襲があり、日本が負けることは100パーセント確実だった。負け方を、選ぶこと、それにこだわったために、あれほどの時間が・・・

彼自身どれほど後悔しただろう・・・

1949年、病床での死の言葉は、

「永遠の平和、永遠の平和」だった。

2

満州事変前の参謀室。

石原寛治はひとり酒杯を傾けていた。

そこへあらわれたおじいさん。

「あんた、そんなことしたら、大変なことになりますよ」

「な、なにをいっとるんだ」石原はのけぞった。

「日本はずるずる戦争に巻き込まれます」

「あーん、何をいっとる。いまうまいバランスでイギリスも何も言えないんだ」

「そんなこと今のうちだけで、日本はアメリカともめて、アメリカと戦争になります」

「・・・何と・・・それはわたしの世界最終戦争論そのままではないか・・・誰から聞いた」

「あたしは未来から来たんだよ。あたしの言うことは本当だ」

「・・・なんと・・・それでどちらが勝つ・・・」

「分かり切った話だ。アメリカに、日本はボロボロにされる」

「むむむ・・・信じられん」

「ばか。満州をとるのはやめて余計なことはするな！たのむから」

「バカ野郎。日本は今恐慌のあおりで沈没しかけておる。この方法しか、日本を救う手立てはないのじゃ」

「ああ、あさはかな男。キレ者の浅知恵だ・・・」

「・・・」

石原は自信満々、机を離れ、葉巻を手に窓辺に向かった。

「見る、あの月を。大陸から見る月は赤く大きい。この風景が、日本のものになる」

おじいさんはその横顔を見ながら考えていた。

（こいつはうわさ通り魅力がある。なにしろ一万の兵で三十三万の中国軍を破って満州をモノにするのだ。そのあとも226事件では命を張って鎮圧にあたり、日中開戦をなんとか防ごうとし、東条英機をバカ呼ばわりして左遷される・・・頭がよすぎた男だ・・・）

「ああ・・・もう歴史は変えられんのか」

おじいさんは深いため息の後で、静かにそう言った。

「その通りよ。」石原が振り返った。「お主の予言がどのようなものか私は知らん。当たろうとも外れようとも、我は我が信ずる道を、ただ行くのみ！」そう快活に言い放って、石原は扉の向こうに消えた！